磐城商工時報

月[illegible]回發行五、十五、廿五日
發行兼編輯人印人　渡邊源吉
福島縣平田町二番地
發行所　磐城商工時報社
廣告料五號十四字詰一行廿錢場所指定拾錢增
新聞定價一部金五錢　一ヶ月十五錢一ヶ年一円六十錢

年頭隨想

早稻田大學總長
法學博士　**高田早苗**

我々は茲に芽出度く昭和四年の初春を迎へることになつた。昭和四年と謂へば如何にも若々しく聞えるが、明治維新革命後の第一年即ち明治元年から數へると今年は六十二年目になる。日本が更生期に入つてから既に六十二年目で人間に譬へたら、壯年時代を通り過ぎて本卦返りの年に達したことになる。われ人共にこゝらで確と方針を定めて前途に向つて歩んで行かねばならない時期である。

惟ふに日本の現狀を見ると、その前途洋々たるものと同時に幾多の突破すべき難關が横つて居る。時代の進歩に伴ひ、色々と改革しなければならない問題が澤山殘されて居る。昔は新しくて時代適應したものでも時代の變遷と文化の進展に依つて今は時代錯誤となつて、社會の發展の障碍物となつて居るものもあると考へられる。勿論斯うした古いものを新しいものに改革されなければならない。併し乍ら新しいが宜いといつても、何でも唯新しければ宜いといふのではない。其の新しさと云ふものは古きが上に築かれた新しさでなければならぬ。過古に根底を有つてゐる新しみでなければならぬと斯う私は思ふ。突然たる忽如たる新しみは眞の新しみに在らずと考へてゐる。之れを言葉を換へて見ると、舊法を學んで新意を出すと云ふことである。即ちそれが改革の道を歩むと云ふことである。今日は何處までも改革して進まなければならぬといふ時代である改革でいけないと云ふことになればそれは革命より外に道がない。先づ改革と革命とどう違ふか。改革と云ふは私が申す如く過去に根底のある新しき道を歩む事である。革命と云ふのはさうでない、一人又は少數の人間の頭の中で考へた事、即ち褒めれば理想、惡く言へば空想であるのを之を過去に構はず歷史に關係せず直ちに實現しやうとするのが革命である。私は革命の道を辿らずして改革の道を進みたいと思ふ。革命と云ふことを輕々しく口にするものがあるが革命が如何に人類に慘害を及ぼし、文化を破壞するかは、佛蘭西の大革命、露西亞の革命等の歷史を見れば一目瞭然である。

併し乍ら吾々が改革で進まうとするならば、茲に大いに心得て置かなければならぬことがある。等一改革すべき事があるか無いかであつて、改革すべき事が無ければ私の樣な心配をする必要はないが、是が一つの疑問である。私の眼から見ると改革すべき事は多々ある樣に思ふ。澤山改革すべき事柄が目の前に横つて居る樣に考へられる。決して今日の世の中は合理的のみであるとは云はれないのであるどうしても之は改めなければならぬ。

吾々は今日御互の境遇に從つて自ら省みて、いろ〳〵改めなければならぬ事があるだらう。それを是非改めなければならぬ而して改革を斷行するに必要な事は自覺的でなければならぬ。自發的でなければならぬと云ふ事である。是が民衆に迫られて據ろなくするといふことになると一つを讓つて聽かれず、十を讓つて相濟まず、殘らず讓らなければならぬと云ふ事になる。その結果は矢張り革命に近い。他から迫られてやると云ふ事ではいけないのである。改革の道を辿るといふ事ならば自覺し自發して自分で以て其の改む可きことはお互に改める。此の考がなければならぬのである。さうして危險な革命と云ふものを忌避したい。是れより外に辿る可き道はないと思ふ。

將來辿る可き道は改革の道である。大改革の道である。思ひ切つて改革するといふことでやつて行く、夫れにしてもお互に進んで行くに就いて何か目標がなければならぬ。その目標は新皇室中心主義である。

我が日本と云ふ國は一大家族的國家である。家族が膨脹した國家である。是は歷史を調べて見れば分る。家族的國家は亞細亞の隅や歐羅巴にも隨分昔はあつたものである。けれども極めて小さいものであつて今は無くなつた。然るに兎に角八千萬と云ふ大衆を擁して居る一大家族的國家がこゝにあるといふ。これ實に大なる誇りである。日本と雖も一民族ばかりで出來てゐる國家ではないが、然し大和民族といふものが中心になつて居て他の支那民族とか朝鮮民族と云ふやうなものは養子である。養子には固より家族同樣の待遇を與へなければならぬがしかし家風は守つて貰はなければならぬ。兎に角、さう云ふ大國家が此處にあると云ふ事は世界に稀有である。又日本國民の誇として宜しい譯である。日本は所謂家族的國家であるから、皇室は御本家總御本家、吾々は分家の宗家の其の又分家である。けれども家族的國家である以上は本來の關係はあるべきである。君民同祖とも云ふ。

吾々の先祖も皇室の御先祖も元は同じであると云ふ所から君民同祖といふ。尤も皇室の御先祖は大神にまします。誠に尊い大神にましますのである。然し吾々の祖先も蓋し神であらう。尙は譬へて見れば皇室本幹、國民枝葉。皇室は幹だ吾々は枝葉だ。生々たる大幹、之れを益々盛んにして、而して枝葉をも繁茂せしめ[illegible]は其根底に培ふと云ふより外に道はない。我國に於ては忠君も愛國も同じことである。皇室の爲めに盡すことは國家の爲めに盡すことになる。大幹に培ふと其枝葉たる吾々の爲めにもなる。

皇室本幹國民枝葉と云ふことが日本の國体であつて、而して其の本幹に培ふ、益々國体を鞏固にする。此の努力骨折と云ふものが忠君愛國である。本幹枝葉の關係より成るこの大國家を益々盛んにする其の努力骨折が是が忠君愛國である。之れが今日まで主張せられる皇室中心主義である。然るに何故私は新と云ふ字を附けて新皇室中心主義を唱へるか、その所以は何處にあるかと云へば、其の忠君愛國が消極的であつてはいけない又服從的のみであつてはいけない。積極的でなければならぬ。更らに進んで輔翼的でなければならぬ。唯積極的に唯々諾々是命惟從ふ。御無理御尤もでは今日の忠君愛國にはならない。今日の忠君愛國は積極的に進んで我君の爲めに盡し奉る、輔翼的に代議士迄出して陛下の政を輔け奉る。斯くの如く積極的、且つ輔翼的でないと今日の皇室中心主義は時代の要求に合致しないことになる。斯う云ふのが私が皇室中心主義に新の一字を加ふる所以であつて、即吾々の國体も擁護しなければならぬが政体も擁護しなければならぬ。明治天皇の御定めになつた立憲政体も擁護しなければならぬ。それが爲めには忠君愛國は積極的輔翼的なることを要する。「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と憲治にあるが法的に見た日本の國体で「天皇ハ統治權ヲ總攬シコノ憲法ノ條規ニ循フテ之ヲ行フ」とあるが則政体の根本である。忠君愛國と云ふが其の忠君愛國は時代に依つてやり方が違ふ、唯忠君愛國といひ形式的に勅語捧讀ばかりやつて居つて、忠君愛國はどうしてやるか、どうするのが今日一番忠君愛國になるかと云ふ事を能く敎へて居ない樣では我國の敎育の効果は疑はしいと思ふ。忠君愛國は時によつて違ふ。昔楠公が湊川で戰死した時、七度生れ換つて皇室の爲めに盡さんと言はれたのはこれ其の當時の模範的忠君愛國である。それを御互が今汽車に乘つて湊川へ行つて腹を切る眞似をしたら氣狂ひの沙汰である。矢張り戰の時と平時とは違ふ。昔と今とは忠君愛國の仕方を違へなければならぬ。今日の忠君愛國をどうすれば可いかと云ふことのはつきりした考を國民は持たなければならぬ。

如何にしたら今日の忠君愛國になるかと云ふと私は憲政濟美立憲政治の美をなす程大きな忠君愛國はないと思ふ。明治二十二年の紀元節に明治天皇から憲法發布の勅語を賜はつた。斯くして立憲政治が創められることになつたが、憲法政治と云ふものは是命惟從ふばかりではいけない。積極的に陛下を輔け奉つる。所謂積極的輔翼的でなければいけない。明治天皇の憲法發布の思召に副ふ樣に憲法をして光りを放たしめ、憲政をして其美果を收めしめる所謂憲政濟美と云ふ事程大切な忠君愛國の必要な一條項であることゝ私は深く信じて疑はないのである。尙ほもう一つ擧げて見ると、今日の忠君愛國の一要項として缺く可からざることは世界的活動だと思ふ。勿論今日は人の國を無暗に取る事などは出來ない時代である。今日に限らない、人の國を取つて自分の領土を擴げると云ふのは決して善い事ではない。それが爲めに結局其の國の滅びた例は幾らもある。そんな意味で世界的活動といふのではない。平和的に通商的に世界を舞臺として活動し、交るべきものとは親しむ。何も自分で外國へ働きに行くと云ふ譯ではないが、どう云ふ仕事をするにしても眼を世界に放つて平和的に通商的に活動する。この世界的活動といふことは憲政濟美と相對して最も必要な事であると思ふ私の謂ふ、新皇室中心主義所謂忠君愛國の新しい意味と云ふのはそれである。斯う云ふ意味で新皇室中心主義を採つて進んで行きたい。

此の昭和新政とも云ふべき新しい時を迎へるに當つて、特に吾が日本國民たる者は昨秋御即位の大典を擧げさせ給へる御年のいまだ御若くましますが、いと御聰明に渡らせ給ふ　今上陛下の御爲めに、又洋々たる前途を有する我が日本帝國の爲めに奮起して、新皇室中心主義の道に勇往邁進せられんことを希望する次第である。

謹賀新年

磐城商工時報社

渡邊源吉
社員一同